

人々は持つだろう

中野 鈴子

人々は持つだろう
あたたかい夕餉を持つだろう
静かな憩いを持つだろう共感にほほ笑み
善意なるものに満ちていよう
無限なるものに包まれ
美しい手紙を秘めていよう
すべてやさしくつよかろう
彼等の敷き布は白かろう
夜は深く
ねむりはあまくまるかろう

<https://aozoraroudoku.jp/voice/rdp/rd1325.html>



お母さん

小川 未明

「お母さん海が見えた！
あれあれかもめが飛んでいるよ。
あれあれあんなに遠く帆掛船が
見えるよ。
お母さんお母さん海が見えたよ！」と
子供がいった。
「沖の白帆が白いか、飛んでいるかもめが白いか、わたしの姿が白いか。」と
波がいった。
「さあ、車夫さん、かまわんで引いてください。」と
母がいった。

<https://aozoraroudoku.jp/voice/rdp/rd151.html>



ペンとインキ

夢野 久作

ペン先がインキにこう言いました。

「お前位イヤなものはない。私がいくら金の衣服を着ていても、お前はすぐに錆さして役に立たなくしてしまう。私はお前みたいなもの大嫌いさ」

インキはこう答えました。

「ペンは錆るのが役目じゃない。インキはなくなるのがつとめじゃない。一緒になって字を書くのが役目さ。錆るのがイヤなら鉄に生まれて来ない方がいいじゃないか。インキがイヤなら何だってペンに生まれて来ただえ」

<https://aozoraroudoku.jp/voice/rdp/rd1163.html>



女

宮沢 賢治

そらのふちは沈んで行き、松の並木のはてばかり黝んだ琥珀をさびしくゆらし、
その町のはづれのたそがれに、大きなひのきが風に乱れてゆれてゐる。気圏の松藻だ、ひのきの髪毛。

まっ黒な家の中には黄いろなラムプがぼんやり点いて顔のまっかな若い女がひとりでせわしく飯をかきこんでゐる。

かきこんでゐる。その澱粉の灰色。

ラムプのあかりに暗の中から引きずり出された梢の緑、

実に恐ろしく青く見える。恐ろしく深く見える。恐ろしくゆらいで見える。

<https://aozoraroudoku.jp/voice/rdp/rd1319.html>



猫の広告文

夏目 漱石

吾輩は猫である。名前はまだない。主人は教師である。迷亭は美学者、寒月は理学者、いずれも当代の変人、太平の逸民である。吾輩は幸にして此諸先生の知遇を辱ふするを得てここに其平生を読者に紹介するの光栄を有するのである。……吾輩は又猫相応の敬意を以て金田令夫人の鼻の高さを読者に報道し得るを一生の面目と思ふのである。……

<https://aozoraroudoku.jp/voice/rdp/rd1306.html>



本コンテストの課題について

課題作品のテキストは、「青空文庫」より引用しております。また、音源につきましては、「一般社団法人 青空朗読」様のご許可を得て提供しております。音源の著作権法上の権利は、「一般社団法人 青空朗読」に帰属し、無断で利用・転載・流用することは禁止されています。